

沈黙と言葉
奥田亡羊

ウクライナ戦争やイスラエルのガザへの攻撃を受け、短歌総合誌で戦争や時事詠に関する様々な特集が組まれている。なかでも現代短歌七月号の「GAZA」特集は圧倒的なボリュームだ。イスラエルの暴挙を怒るうた、身巡りの日常から戦争を詠もうとするうた、信仰から人間を見つめるうた、それぞれに読み応えのある作品が並んでいる。

この時評を書くにあたり、私ははじめ、この特集を読み、前衛短歌の想像の力、幻視の力が現在、どのくらい機能しているのかを検証してみたいと考えた。しかし、やめた。そうした分析を、つまらないと思ったのだ。

脳裏にフランクルの『夜と霧』の冒頭に書かれた「よき人は帰ってこなかった」という言葉が繰り返して過っている。同じ被害者であっても、死者は生き延びた者を問い詰める。シベリア抑留から帰還した石原吉郎が、死は統計ではなく、一人の死であると書いたのも同じ理由なのだろう。

竹山広『とこしへの川』に次の一首がある。

・ 死の前の水わが手より飲みしこと飲みしことひとつかがや
く

被曝した兄のために汲んだ水を、そばに居合わせた少女に与えた歌だ。自分が死にゆく人に何かをしてあげたのではなく、その

人が自分を生かしてくれたという思いをうたっているのだろう。さらに竹山広は、後年、次の一首を詠んでいる。

・ 死の際のわきて痛ましかりしひとりつひに語りき六十年かけて

『空の空』

テレビ番組の取材で、前の歌の少女の末期を語ったことをうたっている。忘れることを許されなかった時間の長さを思う。

小見山輝は戦時中、満蒙開拓青少年義勇軍に参加し、満十五歳で終戦を迎え、自力で満州から引き揚げてきた体験を持つ。生涯に残した六冊の歌集に、戦争を直接的にうたった歌は少ないが、第一歌集『春傷歌』にこのような歌がある。

・ 迫りくる雲の速さに驚きて声にし出でぬあはれ人の名

誰の名が口をついて出たのかわからない。異様な緊迫感を持つ一首だ。

最近、小見山が主宰した「籠」の結社誌をまとまった形で読むことがあり、二〇一七年九月号に次の一首を見つけた。

・ 白壁に水かげろふのゆらぐを見つつ思ふは少年北原隆吉

満州から一緒に逃げた友人が途中で事切れたらしい。何の根拠もないが、私は、北原隆吉はその友人の名前ではないかと思った。他界する一年前の作品である。

・ 言ひ残しゆきし名ひとつ平穩に忘れむことも宥したまはず

竹山広『とこしへの川』

ふたたび竹山広の歌へ。忘却を許さぬ死者がいて、その死が強い沈黙があり、その沈黙を破って語られる名前がある。言葉がどれだけ大きな沈黙に支えられているか。私はその沈黙を聞きたいと思う。